創部９０周年祝賀　埼玉総体壮行会

「創部９０周年」という言葉は簡単には使えない。
学校や会社は黙っていても年数は増えていくだろう。
しかし高校のひとつの運動部が始まって以来、途絶えることなく、かつ分派することも無く９０年が経とうとしている事実は「驚異」に値する。

全国にもその例は稀だと思う。さらに言わせてもらえば、試合成績において、歴代全国屈指の強豪校でもある。

ＯＢの自分が言うのもおこがましいが、まさに「両立」どころか、「文」も「武」も「継続する魂」も備えたクラブなのである。

ではなぜそういったことが実現されたのか・・・・
端的に言えば、関根先生をはじめ、幾多の先輩方の善意と愛部心の結果なのだが、今回は先輩方のお言葉に、その深さを見ることができた。

先輩方が共通して語られるのは「**楽しかった春高陸上部時代**」というキーワードだ。

７０年経った今でも、関根先生は鮮明に覚えているという。

そう、インターハイに行ったか、東部予選で落ちたかではない。春高陸上部時代が充実し、思い出あふれる青春時代であったということに尽きるのである。

その「楽しかった春高時代」だけが、１００年近くもの間、人を魅了して母校に集まらせる。

陸上部ＯＢ会の存続には、仕事のような義務も上下的軋轢も存在しない。
もちろん何がしかの「報酬」もない。
つまり「気持」ちだけ・・・で９０年続いているのだ。
だから「驚異的」だと私は思う。

さらに細かく解析していくと、時代を作った春高の名選手、名監督というのは決して勝ってもおごらない。後輩を威圧することも無い。

そして人間として度量の深さと品格を持っている。

ここで大事なのが、この「品格・知性」だ。
これが欠けると、試合成績だけで誇示する　ごう慢な団体に成り下がってしまう。
いわゆる「出来高制度」（それも悪いとはいわないが・・）の団体になってしまうと、人のつながりは報酬を介した人間味の薄いものになってしまう。
それでは９０年の「魂の継続」はなされない。

いまさらいうまでも無いが、春高陸上部は「自由放任主義」である。
しかしそれは「自由」と「無秩序」を混濁しない「理性」が学生に備わっているからこそ初めて成立する。

小原監督のお話で、まさにそれを再認識した。

先日の埼玉選手権で、小原先生は熊谷会場におられた。
ちょうど跳躍を終えた、ある春高選手と話をしたらしい。

この試合でその選手は引退らしいが、「**自分は春高でよかった**」と小原先生に言ったそうだ。
そしてこうも言ったらしい。
「**自分は春高にもう一度入学して、また陸上部に入りたい。そしたらまた大塚監督に教わりたい。それくらい春高陸上部の３年間は楽しかった。・・・**」と。

私もそう思った。
これが、春高陸上部が９０年続く理由である。

今回、１１０㎜Hで埼玉総体出場を決めた中塚。
「僕は全中に出ることができませんでした。だから絶対高校では全国大会に行ってやろうと心に決めていました。」。私はこういう話が大好きだ。頑張ったが惜しくも・・・・という経験を持つものは、それを大きなエネルギーにできるのだ。

ベストは１５秒０７。
インターハイ全出場ランキングで、６６名中３２番目らしい。
しかしレースでは確実な結果を残し、毎年記録を着実に更新してきた。勝負強さは奥岡に通じるものがある。１５秒を切れれば準決勝突破、ファイナルだって可能性はある。あまり風が追わない感のある熊谷競技場では決して届かないラインではない。

あとは本人が競技を楽しんでくれれば
それでいい。

新人諸君の自己紹介があった。
初々しい一年生たちは、緊張しながら控えめなコメントの選手もいれば「インターハイで勝ちます！」と宣言する選手もいて、

OB を沸かせた。奥岡と後藤は「全国で勝ちます！」と本当に言っていた事を思い出した。
実際に１５歳の少年には無限の可能性がある。
特に中長距離希望者がとても多いので、学内予選が行われる予定だという。
当然モチベーションはあがり、全体のレベルアップが期待される。層の厚さは、かつての黄金期・工藤軍団による８００m～５０００mまですべての中長種目春高記録更新という流れの再燃につながって欲しい。

竹村さんの言葉に、「インターハイに来て、怪物を見ろ！全国ってこんなにすげーやつらがたくさんいるんだ・・・こいつ高校生なのか・・・・っていう、怪物たちを熊谷で見てほしい。」とあった。

私も当時、インターハイに連れていってもらって、超高校級の選手の選手を目の当たりに見て「わあ・・・・こりゃすげーや・・・・」「自分はどうしたらいいんだろう・・・？」
とインスパイアされ、今も大きく影響をうけている。

スポーツをする以上、競技の力差をどう受け止めるかが大切だ。全国のトップ選手になれるのは数名なので、それ以外はいずれかのラウンドで負けを味わうことになる。
そこで学習するのは、己の丈の中で、自分がベストを尽くしたかという事が重要。

今後、そういう場面は試験や進学、社会に出てから毎回のように突きつけられるのだ。

↑　その「インターハイの怪物　２ショット」
無論、「怪物」には常軌を逸するほどの努力があったのは、いまさら書くまでも無い。

私が歯学部を卒業し、春高会に入れてもらったのが１６年前。
大学病院から開業のため帰省してからでさえ１２年が経つ。
ＯＢとしてやっと活動してきた１６年だが、毎年のように新たな発見がある。

陸上部が歴史を積むたびに
「基礎を作ってきた先生、先輩たちは　すごいな・・・」と痛感する。
こんな自分も小さな町の開業医として、部下を指導する経験をしてきたので思うのだ。

目先の時事に右往左往する私には、とうてい先輩達のような組織作りは出来ない。
知れば知るほど、あの人たちの器の大きさは尋常ではない。
かっこいいなぁ・・・と思う。

撮　筆　　３７回　のもと歯科